



日吉ヶ丘

2001年7月1日・第2号

函館ラ・サール高校同窓会
函館市日吉町1丁目12-1 ☎0138-52-0365



(新校舎)

会報第2号 発刊に寄せて



函館ラ・サール高校
同窓会々長 渡辺 良三
(第4回生)

2001年という新しい世紀をむかえ、函館ラ・サール高同窓生の皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。昨年度より年1回同窓会会報を皆様に送らせていただき本年度で2回目になります。この企画に協力していただいた同窓会役員の皆様方に厚く御礼申し上げます。更に充実した内容の同窓会会報になりますよう皆様のご協力をお願い致します。

さて昨年は、兄弟校であります鹿児島ラ・サール高が創立50周年を迎え、華々しく記念行事を催行いたしました。もちろん当同窓会からもお祝いにおうかがいいたしました。当校は鹿児島よりも10年遅れて昭和35年に開校し、昨年で40周年をむかえました。卒業生も優に1万人を超え、第1回卒業生も50半ばを過ぎ、多くの方々々が日本中で活躍しております。このような中、同窓会活動の重要性が増していることを当然の事だと受けとめております。ますます変化の早い社会に、同窓会も又対応を迫られております。

今年1年、同窓会皆様方のご協力を頂き、あるべき方向へ正しく運営させて頂きたいと思っております。

終わりに同窓生皆様のますますのご繁栄とご健勝を心よりお祈りいたしますと共に、函館ラ・サール高校が更に素晴らしい学校に育っていくよう、同窓生一同の応援を宜しくお願いいたします。



卒業生のこと



旧職員中 越 譲

昭和38年第一回の卒業生から、平成4年第30回の卒業生を見送るまでの30年間、その後7年間の講師を経て、平成11年、教師の生活に別

れを告げた。その間、卒業生も1万人をはるかに超えたと思う。今も元気で余生を送っているが、今となってみれば、卒業生の社会での活躍を見聞きすることが、何より嬉しく、生きる心の支えにもなっている。私自身、あまり力はなかったが、ラ・サールという場において「人を育てる仕事」に従事してきたことを、今改めて幸せに感じている。

今年に入って1月のこと、NHK総合TVプロジェクトXという番組で、「奇跡の心臓手術に挑む」一天才外科医の決意、働き盛りを救え、バチスタ手術一が放映された。心臓移植しか手立てがなかった末期の拡張型心筋症の患者に対し、心臓の一部を切り取ることで血液を送り出す機能を高める手術である。この手術を国内で初めて行ったのは神奈川県湘南鎌倉総合病院である。手術は数時間を要し、血液を全身に送り出す左心室の壁を切り取って縫い合わせ、心臓の容積を半分にする。心臓を動かすための負担が軽くなり、ポンプ機能が高まったという。執刀したのは同病院心臓血管部長の須磨医師である。懸命な手術を感動しながらみていて、家内共々アッと叫んだ。

19回生で長男と友達である堀井泰浩医師ももう一人のスタッフとして執刀していたのだ。すぐに東京にいる息子に緊急電話(ふつうの電話ですが)、電話を受け取って「見てる、見てる、泰浩君の事でしょう」と言って切れた。小生医師ではないので医学的なことはよく分からないが、この手術は心移植のように確立されたものではなく、当面の救命手段のようであるが、この手術を受けた患者さんは、その後順調に回復し、正常な状態に近づき、職場復帰を果たして、元気に社会生活を営んでいる。

この番組の放映後、数日して京都におられる堀井君のお父さんからお手紙を戴いた。「親バカですが……」という始まりで(そんなことはない、ない)この番組の再放送(1月28日)を知らせるものであった。

もう一つ。つい最近の5月26日、NHKスペシャル「たった一人の医師として」という番組一北海道えりも町辺地医療の11年、涙と感動の記録一96年に大阪からえりも町に単身赴任していた医師の鈴木陽子さんが、今年3月、町を去った。この間の厳しい闘いとなった辺地医療の日々を描いたものである。

先ず何よりも驚きを感じたのは、この先生の経歴である。この先生は32才で医師になることを決

2001年 函館ラ・サール高校 同窓会総会

日時
8月11日(土) 午後6時

会場
ホテル函館ロイヤル
(函館市大森町・☎0138-26-8181)

会費
5千円(ただし大学生は2千円)

同窓会に出席し、懐かしい友や恩師と再会しましょう。多数のご出席を期待しております。
問い合わせは、同窓会事務局まで
☎ 0138-52-0365

支部紹介

全国に同窓会支部がありますが、今年度の総会日程を紹介します。

- ・札幌支部の13年度総会は9月21日(金)に行われます。まず、6時30分より講演会、同7時より懇親会となります。会場は札幌市の後楽園ホテルです。
- ・西日本支部の13年度総会は9月2日(日)午前11時より、滋賀県の琵琶湖ホテルにて開催の予定です。
- ・十勝支部の13年度総会は8月25日(日)午後6時から、帯広市のガーデンホテルで開催の予定です。

同期会開催案内 (判明分のみ)

各期毎に同期会が設けられ、毎年、或いは数年に一度、親睦の会を催しておりますが、今年の今後の日程は次の通りです。

- 3期生＝毎年1月2日開催(函館、ホテル函館ロイヤル)、5期生＝毎年1月2日開催(函館、ホテル函館ロイヤル)、6期生＝10月か11月に函館で開催の予定。東京支部は毎年11月に開催、今年は11月17日(土)、11期生＝毎年1月2日開催、14期生＝12月1日に東京同期会開催、18期生＝9月頃に開催予定。

Welcome to LaSalle Net!

8期生 大野英士

鹿児島・函館両校のOBで運営されているラ・サール・ネットのご紹介をいたします。

ラ・サール・ネットは、函館、鹿児島の両校の卒業生、学生、ラ・サール関係者のML(メーリングリスト※注参照)です。ラ・サール会に縁があり、インターネット(電子メール)の環境をお持ちの方ならどなたでも参加することができるものです。

このMLは、平成7年7月に鹿児島5期の永吉寛良氏が構想を提案したことにはじまりました。同年8月に運用が開始されて以来5年経過し、会員数も700名を数え、日々活発な意見・情報交換がなされています。



両校の関係者が参加しているという性格から、各校の同窓会のどの支部にも属さず、運営はラ・サール・ネット規約に沿って選ばれた委員からなる運営委員会が行っています。また、必要な経費はすべて、会員の寄付によりまかなっています。現在鹿児島23期の上妻隆秀氏が代表を努められ、運営委員として函館から4名参加しています。

私は、長男(高3)が母校にお世話になっており、5月まで日胆支部(全国に10あるPTA支部の一つ)の支部長を努めさせていただいたこともあり、函館校との連絡係りを兼ねてお手伝いさせて頂いております。

このMLのおかげで鹿児島の方々との交流もできるようになり、ファミリースピリットを身をもって実感しております。これもラ・サールなればこそなのでしょう。

最後に、是非ホームページをご覧いただき参加されんことを念願してペンをおきます。※詳しくは下記のホームページをご覧ください。

◎ラ・サール・ネットHP

<http://www.asahi-net.or.jp/~uy2h-trt/lsnetj/>

※参加登録した人がメーリングリストのアドレスに電子メールを出せば、ただちに登録全会員に自動配信されるサービスです。

た。約3分の2は転居先不明か音信不通で、首都圏での人間の移動のすさまじさを実感した。

当日は150人ほどが来てくれた。何しろ、首都圏で初の全体会だったので、会場は異様とも言える熱気に覆われた。「やあ、やあ、やあ」と肩をたたく者、抱き合う者、校歌に涙する者、後輩たちの顔は定かにわからねど、幹事の苦労も吹き飛んだものである。

その際、二期生有志に「東京支部は発足した。来年は君たち二期生が幹事となって二回目をやってくれ」と、通信費の支度金として現金10万円を手渡した。これには複数の証人がいる。しかし、遂にこれまで二回目は召集されずに月日が過ぎ去った。一体、あの10万円はどこにいったのか?

閑話休題。あれから10年。色々なことがあった。経団連会館での集まりにどうしても日程のやり繰りがつかず、申し訳ないことになってしまったレナード先生が亡くなられた。先生は大学の授業のお忙しい中、新宿での準備会に出たこられ、相談に乗ってくれた。皆や会場の都合で、会はレナード先生が出席できない日に設定せざるを得なくなった。電話の向こうで、先生の落胆の声が聞こえた。幹事として断腸の思いであったが、先生に泣いてもらうしかなかった。だれだれに会いたい、あの生徒はどうしますかと目を輝かせ、あれほど同窓会を楽しみにしていたのに。

私としては来年も、再来年もチャンスはあるからと思っていたのだが、同窓会はなく、私の地方転勤もあって遂にレナード先生とお会いする機会を逸してしまった。その後、追悼会を東京で開いた。久しぶりに、国語の柳瀬喜代志先生(早大教授)にお会いできた。しかし、その柳瀬先生も鬼籍に入られた。月日の無常さを思うばかりである。

最後に、少し元気の出る報告を。一期生は菊地俊治君(版画家)の個展、志村智雄君(前進座)の芝居、忘年会と年三回は集まって、飲んでいる。この5月25日にも菊地君の個展をだしにして七人が集まった。その際、鹿児島の「東京ラ・サール同窓会」会長の深江方次氏(七期)に来ていただき、鹿児島の東京支部の活動について色々ご教示を頂いた。同会はOB約5千5百人を擁する首都圏の同窓会で、年1回の総会には300人ほどが集まる。その他にゴルフ、金融、建設不動産、医療、法務などの部会がある。また、各年次ごとの同期会、埼玉、神奈川、千葉の各地区部会もある。新人OBの歓迎食事会も年1回、開催される。

恐るべき組織力で、フィリピンのラサーリアンとの交流も活発と聞いて、我々函館勢は酔いがいっぺんに醒めた。「我々も何とかしなくては」と議論はしたが、首都圏全体で何か立ち上げるには、一期生だけで出来るわけもなし。これを読んで何かいいアイデアがあったら、函館の同窓会事務局にでも便りを寄せて下さい。

心し、猛勉強を開始したという。その時は、すでに結婚していて、ご主人と子供さんが二人という家族の主婦であった。36才で大阪市大医学部に合格、42才で医師になったという。そして、'90年にえりも町に赴任、辺地医療をたった一人で支えてきた。何せ「えりもの春は何もない春です」(森進一)と歌われる辺地なので、医師は来てても一年かそこらで去っていったそうである。医学統計によれば、日本の町村レベルでは人口600人に医師1人(数は多少違うかもしれない)だそうであるが、そこえりも町では人口4,600人に医師1人であるということから、その厳しさには想像を絶するものがある。鈴木先生が、11年もいて、この地を離れられなかったのは、後任の先生が決まらず、自分を待っている患者さんを捨てられないという職業倫理感からくるものであったと思う。そこへ'99年一人の青年医師が赴任してくることになり、その顔が写し出された。それは何と18回卒業生の藤戸収作君である。彼は東京のド真ん中において、名門病院と知られる虎の門病院にいて、ここからの転進である。矢張り来るべき人が来たという深い感動が、彼の高校時代の印象と重なって嬉しかった。

今回はたまたま最近のテレビから、医療関係に携わる卒業生の活躍を2例記したが、医学界だけでなく、広く各方面において、これと同様の活躍を数多く見聞きしている。僕の手元にも卒業生から送られてきた学位論文や、著作物等が残されている。

例えば僕の社会化地理の分野では、9回生の埼玉大学教授齊藤享治君の「日本の扇状地」、共著ではあるが「ポーランドにおける歴史的都市および集落の景観変化と修景保存」の大作。10年生の東大先端科学技術研究所教授の橋本和仁君の「光クリン革命」(酸化チタン光触媒が活躍する)、そのほか、医学論文等である。

学校図書館でも上記番組のビデオや卒業生の論文、著作物を集めたコーナーを設け、LS生に広く閲覧させるようにすれば、生きた進路資料にもなり、先輩卒業生から後輩LS生への無言の励ましにもなると思う。

東京支部からの近況報告

1期生 大野英士 誠

東京支部といっても全体の東京支部なるものは現在ない。この話はあくまでも一期生の東京支部の活動内容であることをまずお断りしたい。

今から11年ほど前、東京大手町の経団連会館を会場に、首都圏の全体の同窓会をやったことがある。一期生が企画準備、そして受付をやって「函館ラ・サール高校同窓会東京支部」を旗揚げした。当時はまだお元気だった野本副校長が、はるばる上京して下さり、東京・日野の修道院からも先生方に来ていただいた。その時は、数年前に発刊された同窓会名簿を基にはがきを千人以上に出し、返答は350人ほどあ

IT'S A LONG WAY TO LA'SALLE HIGH SCHOOL

PTA関東支部統括支部長 四方 準一
(11期生)

PTA支部長会議で函館を訪れた時のこと、桜満開の五稜郭で高校時代にタイムスリップしそうな感覚におそわれました。30年ぶりに見る桜は、昔と変わらない美しさで、本を片手に散策した当時のみずみずしい記憶が久しぶりによみがえったのでした。

私は今、埼玉県に住んでいます。ラ・サール学園卒業後、東京の大学を出て、当地に就職し、現在、子供2人を育てています。「思えば遠くに来たものだ」の心境です。まあ、遠い埼玉の地にはいますが、心は今もふるさとの北海道に半分あります。縁あって(私の望郷の思いもあり)2人の子供が続けてラ・サール高校にお世話になっています。上は一昨年卒業し、現在大学生。下は高校2年生です。

私は棋道部に所属しておりました。子供達も是非、同じ部に所属してもらい、先輩・後輩の関係になれば嬉しいなど考えていましたが、幸い、2人とも入部してくれ、全国大会にも出場する事が出来ました。親子3人の盾が職員室前に飾ってあるのを見た時は感無量で、ラ・サールに入れて良かったとつくづく思いました。これも親子代々御指導を頂いている棋道部顧問の工藤先生をはじめ、諸先生方のお陰と深く感謝しています。

このように、親子ともども大変お世話になっていることから、今年度、PTA関東支部の支部長を引き受けることとなりました。

関東支部は現在、生徒が120人います。なんと中学生はそのうち101人を占めます。今や、函館本部に次ぐ大所帯になっています。中学校は、関東では大変な人気で、こちらの難関校と引けを取らない難しさとの評判です。「函ラサ」との愛称が小学校の塾で広まっているとか。時代は変わっていきますが、ラ・サールに対する関係者の信頼の絆は益々強まっていくことでしょう。

今年度、中1から高3まで全学年がそろいましたので、今後の支部の発展が楽しみです。ファミリースピリットで一致団結し、いい支部になるよう努力したいと思います。

さて、桜を見ていて、思いを深くした事がありました。それは、子供たちが、学園の先生方や地元PTAの方々など函館のあたたかい人々に導かれ、素晴らしい自然や歴史のある函館のまちの中で育てていただいていることへの感謝の気持ちです。桜の木が美しい花を咲かせ、函館が多くの人を魅了し続けているのも、長年に渡る地元の方々の目に見えない地道な努力と函館を愛する心の賜物だと思います。子育ても同じで、子供たちが素直に成長し、一歩大人として、社会に巣立っていけるのも、ラ・サール学園の先生方と地元PTAやOBの皆様方の愛情と御指導のおかげと心から感謝しております。函館に来る機会

も増え、再び青春がよみがえった感じです。遠い埼玉の地でIT'S A LONG WAYを歌いながら、ラ・サール学園の発展と皆様方の御健勝と御多幸をお祈りしています。

会報に寄せて

11期生 藤井 眞吾

4月に、関西在住のラ・サール高校卒業生達と同窓会のような催事が京都であり、函館ラ・サール卒業以来、なんと27年ぶりに学舎を共にした「友」達とお会いする機会がありました。と申しましても、鹿児島ラ・サールの4期生もいらっやれば、函館ラ・サールの20期生も居るというわけで、私と同じ11期生にはお会いすることは出来ませんでしたし、年齢ばかりか職業も多種多様、共通項と言えるものは「青春時代の僅か三年間を聖ラ・サールの精神のもとに学んだ」というこの一点だけで、京都・祇園の最も猥雑な空間で、飲み尽くされては満たされる杯と、酔う程に蘇る日吉ヶ丘の景観との妙なコントラストは、初めて対面する者同士が肩を組み、半ば咆哮するようなラ・サール応援歌や賛歌で絶頂に達していました。

酩酊する足取りで、祇園の芸妓とすれ違い様「日吉の～丘より望む、宇賀の浦の波…は、光ってんだぞ～」と叫んだ者は居なかったものの、学友の顔と顔、そしてブラザー諸氏の優しい笑顔、古文の先生の素っ頓狂な声、振り向き様の数学の先生のぎょろ目、東北訛りの英語の先生、神々しくも最高の子守歌だった倫理の授業、等々などが早送りのビデオのように我々の脳裏を凄まじい勢いで駆け抜けたのは事実です。

私は京都大学農学部博士課程を中退して、子供のころから愛して止まなかったギターを学びにスペインへ留学しましたが、そこには「ラ・サール中学」や「ラ・サール高校」が極く日常的にありました。スペイン語では「ラ・サイエ」と言うような発音になります。現在は音楽を、そしてギターの演奏を生業としていますが、私にとって日吉ヶ丘での3年間はあまりにも清新で刺激的、いつ如何なる時でも、音楽を創造するエネルギーになっているような気がします。音楽はいつも、人と人との関わりの中に存在しています。母校ラ・サールでの教え、そして友と学びあったもの、師に与えられたものは、あまりにも深く、汲めども尽きぬ教訓です。

いきなり蘇る30年前の思い出

12期生 後藤 治行

1974年に卒業以来30年近く経ちました。ラ・サールを長男が今年卒業、次男が高校、3男が中学にそれぞれ入学し息子全てがお世話になることになりました。生徒として通った学校に子供たちが進学を希望し、今度父母として関わる事が出来ることをとても嬉しく思っています。

子供の入学式のとおり、新しくなった校舎、体育館、寮などに戸惑いながらも昔の記憶を手繰り寄せながら散策しました。旧知の先生に(三森先生、沖田先生、工藤先生、井上先生、



これ以上数えるとそれだけで規定の字数を越してしまいます)お会いして、いきなり30年前の石炭ストーブの校舎と膾炙した臭いの洗面室や学習室の自分の座席、教室の隣の席の友の顔まで思い出しました。15歳の時、帯広から特急で8時間、田舎の中学校から初めてラ・サールに入学した時の不安と緊張、意欲でそれらを押し込み毎日背伸びしながら頑張っていたころを思い出します。意欲だけで支えていた毎日だったように思えます。今から思えば酒もタバコもやらず禁欲的な生活がそれだけのエネルギーを作り出していたのかもしれませんが。わくわくどきどきした当時を思い出させてくれた定年までラ・サールで教えてくださる先生方に感謝いたします。

十勝の同窓会も8月25日に10回目の総会を迎えます。先日も20歳以上差のある役員会の席で海川先生や金井先生の話で盛り上がりました。古くからいる先生を話題にしながら年齢を超えた付き合いの出来る同窓会主催の行事に毎年30名近くの同窓生が集まり、十勝ラ・サールネットも徐々に出来上がりつつあります。ラ・サールの名前に誇りを持ちつづけることが出来る学校や寮や職員の方々の長年の努力に感謝し、これから6年また函館通いを続けます。

It was a long way

西日本支部幹事 山本 真司
(12期生)

「同窓会を立ち上げませんか」という内容の葉書を頂いた。また、新たな財テク勧誘だろうか、いつもならすぐに捨ててしまうのだが、何かか思いとどまった。出会いの機会は偶然の重なり合いなのかも知れない。4期の諸氏が中心となって、函館ラ・サール西日本支部総会が開催された。何のしがらみもない、ゆったりとした集まりだ。日々のストレスからひと時解放されて、それぞれの少年時代へ回帰していく事は何と甘美なことか。風土の違うこの地に一瞬、函館の風が吹き抜ける。芳しい香りと懐かしい言葉の抑揚。年齢や立場を超えて歓談の輪が広がっていく。It's a Long way の囁きが合唱へと変わり、再会を約しながら家路につく。

さて、1999年に発足した西日本支部は幹事会の申し合わせでは、愛知以西をその範囲としている。ケブラチヨ(中越先生、同窓会誌なのでご勘弁)的には、フォッサマグナを基点とすべきかも知れないが、雰囲気や決めた気がする。随分広範囲だという印象は免れないが、新幹線や航空路を考慮すると、決して非現実

